



目次

- ・心のふるさと無形民俗文化財『巫女舞と里神楽』……………2
- ・特別展『舎密から化学技術へー近代技術を拓いた男・宇都宮三郎ー』を終えて……………3
- ・収蔵資料の紹介 最近の収蔵資料から……………4
- ・体験学習レポート『縄文土器野焼き体験』……………6
- ・史料紹介 拳母藩内藤家文書……………7
- ・文化財シリーズ・資料館ニュース……………8

宮流神楽（堤町 堤八幡社にて）

巫女舞と里神楽

スッテンスッテン

ピーヒャラピーヒャラ

ドーンドン

秋祭りは収穫祭です。市内各地の神社では、豊年を神様に感謝し、祭礼が行われます。

神事に続き、神楽殿から甲高い神楽笛の吹き出しが響き渡ります。太鼓の打出しとともに神楽の囃子^{はやし}が奏され、巫女装束をまとったかわいい女の子による舞が神前に奉納されます。

かつては、市内の多くの神社で見られた光景も、いまではなかなか目にすることができなくなりました。



鈴の舞



扇の舞

神楽のルーツは宮廷神楽であり、御神楽ともいわれます。これに対して一般に行われる神楽を里神楽といいます。

里神楽は、大きく分類すると、湯立神楽、出雲流神楽、獅子神楽、巫女神楽の4種類があります。

なかでも巫女神楽は、天照大御神が天岩戸にお隠れになった際、天宇津女命が舞ったものといわれ、神楽のなかでは、一番古いもので、京都を中心とした近畿地方以西に多く見られます。

豊田に見られる里神楽は巫女神楽に属するもので、一般的には「巫女舞」と呼ばれ、熱田里神楽の系統です。現在、宮流神楽舞太鼓、中根里神楽連、八草のチャラボコ系神楽の3種類が現存しています。

豊田の里神楽には2つの大きな特徴があります。ひとつは、舞子が子供であることです。基本的に小学校3年生から5年生までの女子にしかその資格がないことから、正確には巫女舞というよりは童舞であると考えられます。

ふたつめとしては、囃子が神楽笛と太鼓によるものであることです。近畿地方の巫女舞が、歌あるいは雅楽によるものが多いのに対して、笛と太鼓による囃子は、この地方の位置的な背景から、湯立神楽などの影響も否定できないところです。これらは、近畿地方の巫女神楽との大きな相違点でもあります。

ところで、神社で奉納される巫女舞にはもうひとつの巫女舞があります。「浦安の舞」や「豊栄の舞(おとめの舞)」といわれるもので、これは全国的に神事として行われており、民俗芸能に属する里神楽には含まれません。

堤町の酒井信男さん(86歳)は、今では、少なくなった里神楽を伝承する師匠のひとりです。45歳で、知立八ツ橋の宮流神楽舞太鼓3世家元高井師匠に師事し、現在四世家元を継承しています。宮流神楽舞太鼓の稽古は礼の稽古といい、稽古は礼儀から始まり、舞、笛、太鼓の順に習います。

舞には「榊の舞」、「鈴の舞」、「扇の舞」、「四方の舞」など9曲があり、小学4年生の女子が巫女として舞を奉納します。また、囃子は、「下り葉」、「神明」など7曲が伝承されています。



宮流神楽舞太鼓と堤町の子供たち

(前列中央が酒井師匠：堤八幡社にて)

これらの里神楽は、豊田の貴重な文化財(民俗芸能)ですが、いずれも指導者の高齢化により、今後の継承が危惧されます。

(豊田地域郷土芸能研究会)

「^{セイミ}舎密から化学技術へー近代技術を拓いた男・宇都宮三郎ー」を終えて

11月3日から12月2日までの期間で開催された特別展「舎密から化学技術へー近代技術を拓いた男・宇都宮三郎ー」は、「日本の近代化学の父」と言われる宇都宮三郎を主題とした企画としては世界初の展示でした。そして豊田市郷土資料館としても、科(化)学・技術分野の展示は新たな試みとなるものでした。



11月2日に行われた内覧会の様子

これまで宇都宮三郎の幅広い活動は、セメント・炭酸ソーダ・耐火煉瓦の製造、醸造法の改良など、主な業績の分野にのみ光があてられ、全体が見通されることは稀でした。今回の展示は、宇都宮三郎個人を中心に据えて彼の生涯と業績を体系的にまとめた点と、新たに発掘した資料を含め、宇都宮三郎に関する基本的な資料を網羅することができたという点で成果があったと言えます。

しかし、存在することはわかっていながら所在を確認できなかった資料や、展示の準備段階で浮かび上

ってきた不明な点など、展示を終えてなお、宇都宮三郎に関しては多くの課題が残っています。

所在を確認できなかった資料としては、勝海舟が宇都宮三郎へ宛てた手紙や、『セメント製造所報告書』と『錦径舎学則』の原本などがあります。そして記録や資料が乏しく、宇都宮三郎の具体的な活動内容が不明な事項としては、岩倉使節団に随行してヨーロッパ各国を巡った際の活動、大坂舎密局での活動、明治期の理化学系の学会への関与、考案した「平地窯」についてなどがあります。

その他にも、彼の自伝とも言える『宇都宮氏経歴談』に登場する人物や、「宇都宮三郎旧蔵アルバム」に収められている人物写真、宇都宮三郎の周辺の人物と人脈など、近代日本の科(化)学・産業の発達を考えるため、さらに調査が必要な多くの課題があります。

宇都宮三郎については、名誉や富に全く執着しなか



宇都宮三郎の遺品類(第2展示室)

ったその人柄が災いしてか、残念ながらその功績に比べて知名度が低いと言えます。彼の親友である福沢諭吉が、現在一万円札の「顔」となっているのとは対照的です。しかし科学や産業の分野だけでなく、日本の近代化を考えるうえでも、宇都宮三郎の足跡には重要な手がかりが残されていると考えられます。展示は終了しましたが、今後も宇都宮三郎からは目を離すことができません。(天野博之)

特別展図録『舎密から化学技術へ』は、豊田市郷土資料館にて好評発売中です(1冊1,500円)。



宇都宮式電複元模型(第1展示室)

収集資料の紹介

最近の収蔵資料から

主に2001年4月～10月に郷土資料館に寄贈され、台帳登録の済んだ資料を紹介します。市内各所を中心に一覧表にあるような資料が寄贈されました。そのうちおもだったものについて解説します。

11008



常滑焼の焼酎瓶で、かつてはよく見かけたものですが、近年は使われなくなっています。

11010 ～ 11033



尋常小学校の教科書がほとんどですが、中には国民学校の教科書もあります。国民学校は昭和16年～21年という短い期間にだけあった学校で、その教科書はひじょうに貴重なものです。

11048 ～ 11050



矢作川での漁に使われていた道具類で、旭町のもんです。古い資料ですが、大切に保管され受け継がれたものです。

11054



宮口地区において7月の「行者祭り」という祭礼の際に使われる屋形です。この資料は現在使われている屋形の前のもので、主な部材は大正初期に作られたものです。

11056



砂糖瓶はガラス製で、飛行機の絵柄となっています。この資料は戦時中のもので、当時の時勢をよく表しています。



NEC製の初期のパソコンです。現在の Windows のパソコンは32bit のものですが、この PC8801は 8 bit のパソコンで、CPUの性能やメモリーの容量が現在のものとは比べ物にならないほど差があります。当時はまだパソコンはあまり普及しておらず、NECの PC8801はシャープのMZシリーズと並んで家庭にパソコンが普及しはじめた頃の代表的な機種で、当時の世相を代表する資料でもあります。88シリーズは次の98シリーズと並んで、“N88-Basic”と呼ばれたプログラミング言語によりプログラムを組んでパソコンを動かすことが一般に普及していく中で貢献した機種です。

この他にも現在整理中の資料が数多くあります。みなさんのお宅にも歴史や民俗に関係した「こんな資料があるよ」あるいは「古くていらないけど、使えるならどうかな」といったようなものがありましたら、ぜひ郷土資料館までお知らせください。

(杉浦 裕幸)

受入番号	資 料 名	数 量
10786	脱穀機	1
10996	ポンプ	1
10997	高岡音頭手拭い	1
10998	火 鉢	2
10999	支那事变従軍記念	1
11000	軍人勅諭	1
11001	唐 箕	1
11002	台 秤	1
11003	重 箱	1
11004	重 箱	1
11005	重 箱	1
11006	湯たんぼ	1
11007	ひのし	1
11008	焼酎瓶	1
11009	賞 状	1
11010	『帝国少史』巻 1	1

受入番号	資 料 名	数 量
11011	『中学漢文読本』巻 3	1
11012	『高等小学理科書』	1
11013	『尋常小学読本』巻 4	1
11014	『尋常小学読本』巻 6	1
11015	『尋常小学読本』巻 6	1
11016	『尋常小学読本』巻 7	1
11017	『尋常小学読本』巻 8	1
11018	『尋常小学読本』巻 9	1
11019	『尋常小学修身書』巻 3	1
11020	『尋常小学修身書』巻 4	1
11021	『尋常小学修身書』巻 5	1
11022	『高等小学理科書』	1
11023	『高等小学理科書』	1
11024	『尋常小学地理書』巻 1	1
11025	『尋常小学算術書』	1
11026	『尋常小学算術書』	1
11027	『尋常小学日本歴史』巻 1	1
11028	『高等小学理科家事教科書』	1
11029	『高等小学読本』巻 2	1
11030	『高等小学修身書』巻 2	1
11031	『高等小学地理書』巻 2	1
11032	『商業教科書』	1
11033	『ヨミカタ 二』	1
11034	『現代青年』	1
11036	一升榼	1
11037	榼	1
11038	五合榼	1
11039	1 リットル榼	1
11040	一升榼	1
11041	榼掻き	1
11042	矢 立	1
11043	上皿天秤	1
11044	筏とび	1
11045	ヤ ス	1
11046	練炭火鉢	1
11048	眼鏡箱	1
11049	釣り竿	1
11050	筌	1
11051	たも網	1
11052	裁縫箱	1
11053	ガラ紡反物	1
11054	屋 形	1
11055	トースター	1
11056	砂糖瓶	1
11057	NEC PC8801mk II SR	1
11058	手 鉤	1
11059	手 鉤	1
11060	刺 し	1
11061	刺 し	1
11062	刺 し	1
11063	ロットリング	1
11251	拳母祭り絵馬	1

縄文土器野焼き体験

野見小学校からの依頼で、6年生の縄文土器作り体験の講師として、郷土資料館の職員が授業に行ってきました。

夏休み前の授業では、市販の粘土に各自が採取してきた自然の粘土や砂を混ぜて、それぞれが個性的な縄文土器を作りました。粘土紐を積み上げたり、はがれないように飾りを付けたりする作業に苦労していたようです。

夏休みの間に乾燥させ、2学期に入るとさっそくその土器を野焼きすることになりました。残暑の中、みんな汗を流して、土器の野焼きを体験しました。どのように野焼きをしたのか、その方法を順番にみてみましょう。

①野焼きをする場所は、火事になる恐れのない運動場を選びました。熱が地面に逃げるのを防ぐために、4畳ほどのスペースにトタンを敷きます。

②トタンの上にワラを敷き詰め、燃やして灰にします。その灰の上に土器を並べます。

③いよいよ土器を焼きにかかるわけですが、急激に温度が上昇すると、土器の内部に残っている水分が膨張して土器が割れてしまうので、並べた土器を囲むように薪を配置して、はじめは低い温度で土器の水分を完全に飛ばします。



はじめは囲むように火を焚きます

④徐々に薪の量を多くし、少しずつ温度を上げていきます。土器の色に変化が見られるものも始まります。

⑤3時間ほど囲むように火を焚いて土器を焼いたあと、今度は土器を覆うようにワラと薪をくべて、一気に温度を上昇させ、どんどん焼きます。この時の土器の温度は600℃くらいに上がっています。

⑥途中でアルミホイルに包んだサツマイモやトウモロコシを火の中に入れて、土器といっしょに焼きました。



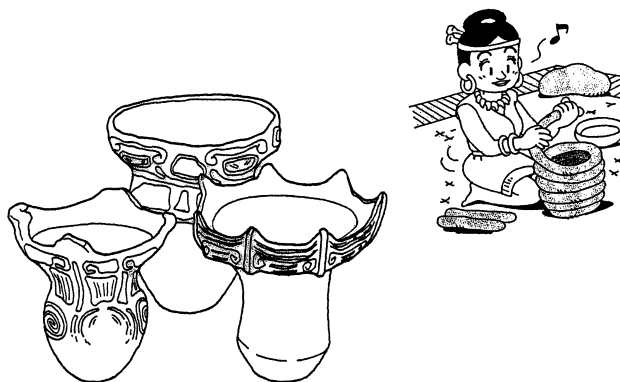
土器を覆うように薪をくべます

⑦火をつけてから約7時間後、燃え尽きた薪は灰となり、焼きあがった土器が顔を出しました。灰の中から土器を出して、サツマイモやトウモロコシを食べながら、土器が冷めるのを待ちます。



焼き上がった土器が顔を出しました

ほとんどの人が、壊れることなく土器を焼くことができました。日も暮れ始め、校舎がオレンジ色に染まる中、焦げ茶色に焼き締まった土器に歓声が沸きました。



(成瀬 憲作)

拳母藩内藤家文書「献上塩鮎仕立方之覚」

～將軍も食べた 矢作川の鮎～

現在豊田市郷土資料館が所蔵している拳母藩内藤家文書は、江戸時代この地方の領主であった拳母藩主・内藤家に伝来した史料です。

拳母藩内藤家は、日向延岡藩内藤家の分家で寛延2（1749）年、上野国安中（現群馬県安中市）から二万石で入封し、明治維新に至りました。

この内藤家文書のうち、今回は「献上塩鮎仕立方之覚」という史料を紹介します。



和紙4枚を袋綴じした冊子の表紙には上記の表題のみが書かれ、一枚表紙をめくると「献上塩鮎之事」とはじまります。

これは塩漬にした鮎を將軍家に献上する際の手順が記された史料です。これによると秋彼岸の少し前に鮎を塩漬けにして9月20日過ぎ頃に荷造りして江戸へ送っていたことがわかります。彼岸の時期によって塩漬が間に合わない時は9月末か10月1日頃江戸へ送り、10月になったら伺いをたてて献上するように記されています。

鮎は勿論、矢作川の鮎ですが、ここに「前廉（^{まえかど}以前）は当所川にても取候得共、近来は川瀬これ無、此辺にては鮎取申不候、領内越戸村より川上にて之取候付て越戸村へ申付買取申候」とあり、江戸時代半ば、拳母城下周辺で鮎はとれず、越戸村より上流でしかとれなかったことがわかります。

この史料の後半部分には「塩鮎^{こしらえ}拵方」として塩鮎の作り方が詳しく書かれています。

「鮎の腹を割、急ぎわたを去り、腹の中黒み之無様によくよく洗ひ候き、頭の中腹の中まで塩漬山につめ候て桶へ段々に並よくならへ押蓋を置、其上に大きな

漬石を棹に懸け申候、右塩鮎をしの日数十五六日乃至廿日程也、日数を経候程よく御座候、荷^{こしらえ}拵致可と存候六七日以前に晴天を待、塩より揚げ菰の上にならへ献上鮎百、其外にかなひ（家内）鮎之を選、尤随分大きなるを揃え次に配り塩鮎上中えりわけ半日程塩水をかはかせ、それより新しき塩を腹の内外へくろみ又新しく菰に並を能、ならへかさね包仕廻候也、右包候後六七日過して包みを明け、損しもこれ無哉善吟味之上、元のこく包、菰の俵箱に入、渋紙に巻之、りうきう（琉球おもて・琉球むしろ）にて上包致し候、次に近持鮎は右菰の俵むしろにて上包荷造申候事」

こうして日数をかけてつくられた塩鮎はほぼ毎年10月初旬に將軍家へ献上されていたようで、内藤家文書の中には10月10日前後の日付で老中から出された「塩鮎進上の返礼」の奉書が67件あります。返礼はほとんどが西丸老中と同じ日付で揃ってあるため、決まって將軍と大奥（あるいは大御所・若君）に献上されたと思われます。又この史料は、「巳五月」に本多兵庫頭内 岩松藤蔵から天野助次郎様（幕府代官）御手代を通して内藤家の家臣 鈴木与七郎宛に出されているため、寛延2年巳年、拳母藩主が本多家から内藤家へ交替する際の引継ぎ文書の一つと考えられます。藩主交替とともに矢作川でとれた鮎の塩漬を献上する役目も引き継がれたことがわかります。



現在も矢作川の産物として知られる鮎、江戸時代の將軍は10月になると塩鮎の届くのを楽しみに待っていたのでしょうか。（伊藤智子）

※引用史料中の（ ）は筆者注です。

※内藤家文書は昭和32年拳母町立図書館（現豊田市中央図書）が所蔵し、平成10年当館に移管されました。



(県指定) 八柱神社の樟

覆うようにそびえています。

社殿の東側にひときわ目を引いて雄大に枝を張っている樹木が県指定の「八柱神社の樟」です。伝承によれば、弘法大師が三河地方教化の折に植えたといわれています。

豊田市の南部、矢作川に架かり岡崎市とをつなぐ橋のひとつに天神橋があります。八柱神社(畝部東町)はこの橋の西側のたもとにあり、境内には県指定の樟と市指定の樟が空を

樹齢は1,000年といわれ、幹の根元が瘤状に大きく盛り上がっています。盛り上がった基部の周囲は17mにも達し、樹高は20mあまりの巨大な老樹です。市指定「八柱神社の樟」は県指定の樟の隣にあり、

文化財シリーズ



八柱神社の樟



樹齢は300年ほどといわれています。幹の基部は県指定のクスノキのように盛り上がっていませんが、その根周りは7.5メートル、樹高も20mに達しています。

(市指定) 八柱神社の樟

資料館NEWS

○百々貯木場跡案内看板寄贈

市指定有形文化財「百々貯木場跡(百々町)」に、豊田ライオンズクラブ(会長・大橋外茂次)と姉妹クラブの北海道土別ライオンズクラブ(会長・上北一幸)から、豊田ライオンズクラブの創立40周年を記念して、案内看板を寄贈していただきました。10月27日に、土別ライオンズクラブの皆さんを迎え、除幕式が行われ、県道から「百々貯木場跡」が、一目でわかるようになりました。



○岩倉神社舞台修復完成

市指定有形民俗文化財「岩倉神社舞台(中金町)」が、市の補助金を受けて修復工事を行いました。5月着工、9月末完成、10月6日の竣工式と続き、翌週12日の岩倉神社祭礼には、地元の皆さんによる歌舞伎「白浪五人男」が37年ぶりに奉納上演されました。

○辻堂の屋根葺き替え完了

市指定有形民俗文化財「市木辻堂(市木町)」の屋根は葺き替えのため、経年により傷みが激しくなり、市の補助金を受けて屋根の葺き替えを行いました。昨今は、屋根職人の減少と茅葺の確保が難しくなっていますが、幸い、近くの下山村に屋根職人清水長雄さんがおられるので、清水さんのご協力をいただき、伝統技法で葺き替えることができました。

利用案内

開館時間 9:00～17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館) 年末年始

入場料 無料(ただし特別展開催中は有料となります)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩17分

■豊田市郷土資料館だより No.38■

平成14年1月25日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎(0565) 32-6561 FAX (0565) 34-0095

E-mail : rekihaku@city.toyota.aichi.jp